

樋口一葉と万国博覧会

―『うもれ木』と「陽明門」―

愛 知 峰 子*

一．はじめに

明治六（一八七三）年に、ウィーンで万国博覧会（以下、万博）が開催された。このとき、明治政府は、はじめて公式に、万博に参加する。国を挙げて各地の特産物等を調査し、名古屋城の「金鯢」（雌側）、谷中天王寺の五重塔の模型などを出品した。漆器や陶器が大好評で、万博参加はその後の貿易の拠点作りに貢献した。それを受けて、政府は、殖産興業などの政策遂行の手段として、内国勧業博覧会の開催や外国の博覧会への出品を重要な政府事業に位置づける。博覧会といえば、ある種のブームになるほどであった。

一葉は、そうした明治日本とともに成長する。博覧会も身近に感じていた^①。彼女の出世作『うもれ木』も、万博出品を題材とし

た作品である。明治二五年、『都の花』に連載された。半井桃水との別離を経て、作家としての自立をかけた作品といわれる。主人公の入江籟三は、名人肌の陶画工だが、欺されて「コロンブス博覧会」に出品する陶器（花瓶）を制作する。コロンブス博覧会とは、明治二六年に米国で開催されたシカゴ万博の別称である。

実は、一葉の次兄、虎之助も陶画工であった。シカゴ万博に出品された陶芸品、成瀬誠志作「陽明門」の制作に関わったとされ、『うもれ木』は、それにヒントを得た作品だといわれている^②。とても興味深い指摘である。残念ながら、それが十分確認できることは、やや疑問の残るところである。だが、シカゴ万博出品の誠志作「陽明門」は、その一部が現存する。

二・成瀬誠志

成瀬誠志は、近代上絵付け隆盛期の名工として知られている。「誠志の年譜」によれば次のような生涯を送った。^③

誠志は、本名を和六といい、弘化二（一八四五）年恵那郡茄子川村（現、中津川市茄子川）に生まれた。茄子川焼の陶工として窯を持ったが失敗し、陶器工場で働く傍ら九谷焼の技法を学んだ。明治四（一八七一）年に妻子を伴い上京した。まずは陶器職人として働き、薩摩焼の技法を学ぶ。翌年には、山内容堂邸内の窯で薩摩白素地（きじ）に絵付けをし、薩摩焼風陶器を製造するようになった。まもなく、芝増上寺山内安立院跡に開窯する。そこで、土を取り寄せ、成形・絵付け・焼成まで、陶器製造のすべての工程を行うようになった。号を「誠志」とし、薩摩焼細密絵付の研究を始める。第一回内国勸業博覧会（明治一〇年）に花瓶（錦手）、大香炉（羅漢浮模様）を出品し、鳳紋賞牌を受賞した。三条実美、北白川宮などの愛顧を得るようになった。薩摩焼細密画の作品は外国人にも好まれて、販売業績が上がり、次第に画工・陶工を数名抱えるようになった。東京での窯は大成功を収めたのである。

しかし、明治一四年、類焼を機に廃窯に追い込まれた。跡地が官有となったため再開できなかったのである。やむなく芝区愛宕町に転居したが、製陶ができない環境となり、絵付けのみで営業

を再開した。

東京の窯は、元々素地を地方の窯から取り寄せて絵付けのみを行うのが中心であった。土もなく、燃料費もかさみ、製陶には不利な地である。財を成した誠志は、日光陽明門の陶製模型の制作を構想し、すべての工程が行える窯を持つため、明治一九年、ついに東京を引き払って郷里茄子川村に錦を飾った。薩摩焼製造に打ち込むため、年貢のあがる田畑も購入して居を構え、屋敷内に「誠志窯」を開く。^④工房は「陶博園」といった。

明治二〇年、京都から月山等^⑤を招いて念願の「陽明門」の制作に取りかかった。誠志は村長（茄子川・千旦林組合村）を務めながら制作を続け、明治二三年にこれを完成させた。岐阜県知事の激賞を受け、万博出品の話が進む。翌年一〇月二八日、濃尾大地震によって「誠志窯」も大きな損害を受けた。が、明治二六年

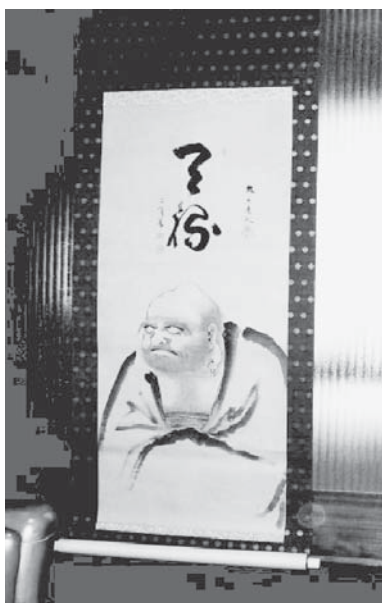


金彩色絵獅子鈕香炉
（源長寺蔵）

背面に「東京南芝愛宕町 明治十六年十一月成瀬誠志」と記載。

開催のシカゴ万博に「陽明門」を出品している。

その後も、誠志は、作陶に専心し、明治二十七年には、中津川市苗木の鉢石から薄黄色（誠志色）の釉薬を作ること成功する。明治三年のバリ万博には花瓶を出品して、銅牌を受賞している。⁶明治三十七年のセントルイス博覧会にも陶額観音像（金彩色絵観音像陶額）を出品して銅牌を受賞した。国内の博覧会等においても数々の賞を受け、晩年は制作の傍ら、審査員も多く務めた。大正一二年死去。七八歳だった。



誠志筆（号界楽）
掛け軸
（成瀬家蔵）

「誠志窯」のやきものは、多く残されている。誠志は、自作には必ず銘（刻印）を入れていたが、当初は茄子形輪郭の中に「誠志」、後には平仮名の「せいし」などとすることが多かった。平仮名の刻印は、「せい」を「し」で茄子形に囲むようにしたもの

もある。また、「陶博園」の刻印も用いた。

なお、茄子川の成瀬誠志邸は、現在も、誠志の兄和助の子孫により居住・管理されている。邸内には窯跡が残る。



邸内「誠志窯」窯跡

三、シカゴ万博出品の陶製「陽明門」

誠志作の陶製模型「陽明門」が出品されたシカゴ万博は、コロンプスの新大陸発見四〇〇年を記念して明治二六（一八九三）年五月に開催された。「コロンプス博覧会」といわれる所以である。ミシガン湖畔のジャクソン公園一帯を会場とし、白で統一し

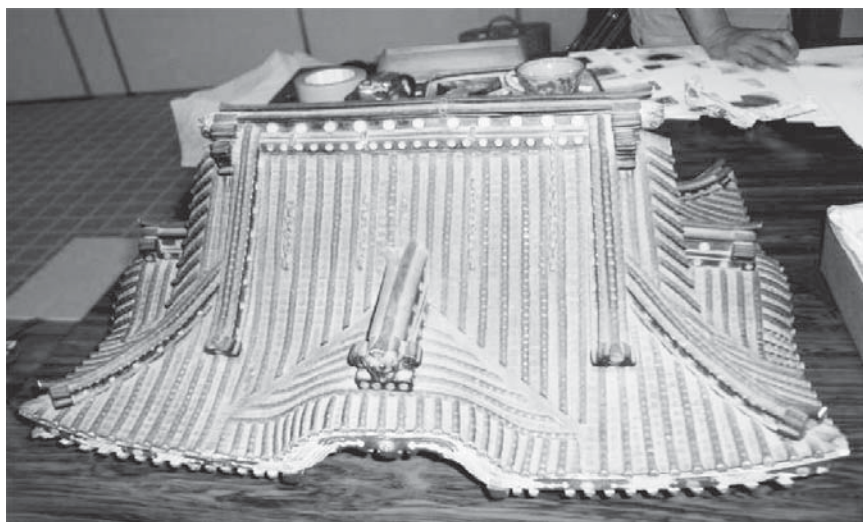
た会場はホワイトシティとも呼ばれた。シカゴの中心と会場は高架鉄道で結ばれ、二九九もあった入り口にははじめて自動改札機が設置された。空中観覧車も初登場して人気を博した。入場者は二、七五〇万人に上ったと伝えられる⁽⁷⁾。

陶製「陽明門」は、この万博で、「工芸一等賞」を受賞した。実物の二五分の一の縮尺で精密・精巧・華麗に作られた模型であった⁽⁸⁾。屋根、柱の飾り一つまで同じように成形し、薩摩焼の技術を尽くして彩色されていた。それが、不運にも、輸送中の荷崩れで万博会場に到着する前に破損してしまった。しかし、原形をとどめた屋根部分と砕けた陶片など一部だけを陳列したところ、それが受賞したのである。

翌年、作品はシカゴからそのまま返送されてきた。誠志は一瞥すると直ぐに蔵に収め、しばらくの間、陶器製造も休業した。精魂込めた苦心作であっただけに、落胆著しかつたと伝えられる⁽⁹⁾。東京府と岐阜県からは、そんな彼に見舞金が贈られている。

一五年後、誠志は、陸軍関係者に請われて、はじめて「陽明門」を蔵から出して見せた。それを機に、知人たちにその陶片を少しずつ分けて譲るようになったという⁽¹⁰⁾。

こうして、万博出展前に破損し「幻の大作」といわれる「陽明門」は散逸してしまった。その屋根部分および一部陶片を、現在は、寄贈によって中津川市の苗木遠山史料館が所蔵している。

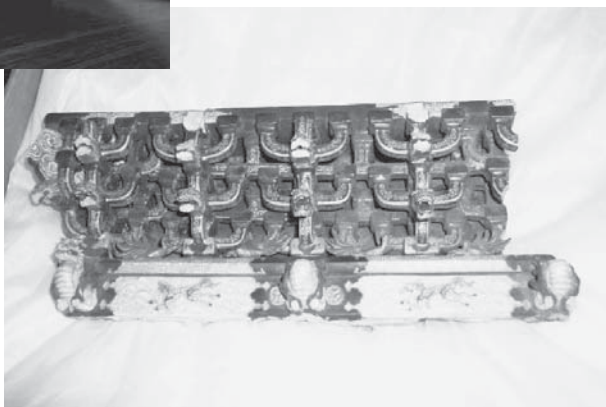


「陽明門」の屋根部分
(苗木遠山史料館蔵)



写真左
同屋根部分

写真右
同陶片（下層部組物）



四、「陽明門」の制作と虎之助

この「陽明門」の制作に、一葉の次兄、虎之助が関わったとされるのは、どういう事情からか。

（一）虎之助と成瀬誠志

一葉には兄が二人あったが、長兄の泉太郎は一葉が一五歳のときに亡くなっている。他方、次兄の虎之助は、一葉より長生きしており、薩摩焼の絵付け師として活躍し、奇山と名のつた。

虎之助は、一六歳で陶工・成瀬誠志のところに六年の徒弟奉公に出た。住み込みで弟子入りしたのである。「陽明門」の作者・誠志と虎之助との最初の接点である。明治一五年のことであった。ちょうど誠志が窯を失い、愛宕町で絵付け業のみを再開していた頃である。塩田良平『樋口一葉研究』には、このあたりの事情が次のように記されている。

則義は、十五年二月本所相生町五丁目三十二番地、陶工成瀬誠至方へ明治二十一年迄満六ヶ年徒弟奉公に出すことに決心した。この成瀬誠至へ当てた則義の誓約書が残つてゐるが、この成瀬は陶工で芝山内丸山下に窯場を持つてゐた。そこで、虎之助は陶器製造および陶画技法を修得した。（中略）これが後に奇山と号し薩摩金襴の画工として一部に名を馳するに至つたのである。⁽¹⁾

奉公先として誠志の元を選んだいきさつは不明である。⁽²⁾が、虎之

助は、そこで修業ののち、明治二一年頃には、薩摩金襴手の絵付け師として弟子を持つほどになった。⁽¹³⁾

その後、塩田氏によれば、虎之助は、師と共に「陽明門」を制作したとされる。もつとも、誠志は、明治一九年（虎之助が弟子入りして四年後）に茄子川に帰郷して窯を持った。その際、虎之助は付いていかず、そのまま東京に残った。⁽¹⁴⁾そこで、「陽明門」の制作のときには、東京から茄子川に赴くことになったという。

廿五年九月二十九日虎之助は重武米山、成瀬誠至と岐阜県に赴いた。美濃国恵那郡茄子川村に、成瀬の窯があつたらしい。仕事は米国の博覧会出品の薩摩金襴の制作である。この月に一葉が執筆しかけた「うもれ木」にコロムブス博覧会とあるのは、恐らくこれからヒントを得たのであらう。米山が主となって奇山が手伝った。製品は、日光陽明門を薩摩金襴で焼き付けたものである。⁽¹⁵⁾

氏は、「陽明門」制作のために、虎之助は成瀬の窯があつた岐阜県まで出かけたとされる。それは、『うもれ木』への影響が推測される事情ともされている。

一葉日記にも、「兄君美濃へ出立」（「につ記」明治二五年九月二九日）とある。虎之助の美濃（岐阜県）での滞在先については、一葉の次のような記録がある。⁽¹⁶⁾

岐阜県下美濃国恵那郡茄子川村

成瀬誠志方

樋口虎之助

すなわち、虎之助は茄子川村に出かけたのである。このとき、虎之助は誠志の元に一ヶ月ほど寄寓したといわれている。⁽¹⁷⁾虎之助が茄子川まで赴いたことは、たぶん間違いない、この間に、「陽明門」の制作に関わったということであろう。ただ、虎之助が「陽明門」の制作にどのように関わったかについては、なお検討を要する。

（2）虎之助の関与

虎之助が茄子川村（中津川市）に出かけたのは、明治二五年九月二十九日である。だが、このとき、「陽明門」はすでに完成していた。前述のように、誠志は、明治二〇年から「陽明門」の制作に取りかかり、二三年の秋に一旦完成させているのである。なお、聞き取り調査をした学芸員原益彦氏によれば、誠志の孫の成瀬豊氏（故人）は、東京での弟子に樋口奇山がいたことは記憶されていたが、奇山が茄子川まで来たこと、および「陽明門」の制作に関わったことは話されなかったということである。「陽明門」の最初の完成までの三年あまりという歳月に比べて、その二年後に一ヶ月ほど滞在し関与したのは、あまりに印象が薄かったということであろうか。虎之助が「陽明門」の制作に関与したと確認することは案外難しいのである。

ただ、「陽明門」が出品されたシカゴ万博は、明治二六年五月の開催であつた。その直前の時期に、ゆかりの陶画工がわざわざ東京から茄子川まで出かけて、しばらく滞在しているのである。

やはり、博覧会出品と関係があると考えるのが素直ではなからうか。

おそらく「陽明門」は、二三年秋に一旦は完成し、岐阜県知事などに見せてはいるものの、虎之助が茄子川に赴いた二五年秋には、まだ誠志の元にあつたのではないか。おりしも前年は、濃尾大地震があり、誠志窯も被災している。一旦は完成していた「陽明門」ではあるが、少し手を加えざるを得ない状況になったのかもしれない。あるいは、出品に当たり、さらに彩色の手直しをする仕上げの必要を感じたのかもしれない。虎之助は、そうした最後の制作過程に関わった可能性はあるわけである。

五.『うもれ木』と「陽明門」

残る問題は、虎之助が「陽明門」制作に関わったことが、『うもれ木』執筆のヒントにされたか、である。

『うもれ木』は、明治二五年一月二〇日、一二月四日、同一八日刊の『都の花』第九五、九六、九七号に連載された。同年夏には執筆中であつたと考えられている。一葉は、七、八月頃、虎之助からの薩摩金欄に関する聞き書きを残しており、東京図書館で薩摩焼関係の勉強もしたようである。完成は、草稿が花圃に届けられた九月一五日とされている⁽¹⁸⁾。

主人公籙三は、コロンブス博覧会に出品するために花瓶を制作する。そして、虎之助も出品作「陽明門」の制作に関わった可能

性がある。が、そのために虎之助が九月二九日に茄子川に向かったとき、すでに『うもれ木』は脱稿していた。その執筆のヒントになるには、虎之助が「陽明門」制作に関与した時期は遅すぎるように思われるのである。

なるほど、『うもれ木』の執筆以前に「陽明門」のコロンブス博覧会出品は決まっていた。『うもれ木』のヒントになったのは、直接には、虎之助が茄子川に出かけたことではなく、それ以前のそうした情報かもしれない。しかし、事前に「陽明門」への関与の話を、一葉が虎之助から聞いていたことを示すような記録はない。他方、博覧会ブームだった当時、まもなく開催される万博やそれへの出品にまつることなどが巷間で話題となっていて、ヒントという点では、そちらのルートで万博出品という題材が一葉の耳に届いていた可能性もある。虎之助が「陽明門」に関与したとことと『うもれ木』を結びつける根拠は乏しく、この点を確認することは難しい。

むしろ、ひょつとしたら、一葉は、兄の関わる作品が万博に出品されることになるとは、『うもれ木』構想の段階では考えていなかったかもしれない。むしろ、すでに述べたように、一葉は、兄に取材しており、籙三と同じ薩摩焼の陶画工であつた兄の話から何かヒントを得たところはあるかもしれない。しかし、作中では、籙三に丹誠込めた作品を打ち砕かせてしまい、出品を實現させないのである。職人の兄が大切な仕事に携わろうというとき、それを知りながら、そこまで不吉なことを、小説とはいえ、題材

として扱うよう構想するかは、疑問の余地もあろう。

六. おわりに

虎之助は、誠志のシカゴ万博出品作「陽明門」の制作に、やはり、ある程度は関与したものであろう。一葉には縁のある博覧会であった。

『うもれ木』は、虎之助のそうした関与とは無関係に構想され、執筆されたものであろう。しかも、その連載は、シカゴ万博開催の前年、明治二五年のことである。執筆時の一葉は、「陽明門」が見舞われるその後の悲運を知るよしもなかった。それなのに、茄子川に赴く兄を送る直前、一葉は、万博に出品予定の作品が破碎される物語を描くのである。「幻の大作」となる「陽明門」の破損する運命を奇しくも予告したかのようなのである。

ともあれ、成瀬誠志作として出展された「陽明門」は、その一部が残存し、今にその美しさを伝えている。

注

- (1) 日記には、「内国勸業博覧会」に関する次のような記述がみられる。
- ① 明治二三(一八九〇)年三月二十六日(雑記2)「三月二十六日、第三回内国勸業博覧会開場式」というメモ。
- ② 明治二八(一八九五)年五月一日(水の上日記)「午後久佐賀より書あり、博覧会見物がてら京都へゆきてかの地よりの状

なり」

また、『十三夜』では、高級官僚の夫人であるお関が、勸業博覧会の出品作を陳列展示して販売所とした「勸工場」、すなわち「小川町の勸工場見物に行きまする度々」と話す場面がある。

- (2) 塩田良平「樋口一葉研究」(中央公論社、一九六八、以下、塩田『樋口一葉研究』、引用は便宜上新字体にした。)二〇三頁。
- (3) 篠原守・原益彦・成瀬豊編『茄子川焼』(中津川市教育委員会、一九八三、以下、『茄子川焼』所収「誠志の年譜」(一一五—一二七頁)および「陶芸家 成瀬誠志の生涯」(九八—一二二頁)。
- (4) 成瀬智子氏(成瀬和助(誠志の兄)の孫、信一(故人)の妻)談。
- (5) 当時、華麗な薩摩焼を製造して人気を博していた、粟田焼の陶工たち。
- (6) ただし、作品の所在は不明。
- (7) 吉田光邦編『図説万国博覧会史』(思文閣、一九八五)一九二頁。
- (8) 全体の大きさとしては、「二尺五寸(約四五センチメートル)四方、高さ二尺五寸(約七五センチメートル)」「茄子川焼」一一〇頁」と推定されている。
- (9) 『茄子川焼』所収「陶芸家 成瀬誠志の生涯」(九八—一一二頁)。
- (10) 故成瀬豊氏(誠志の孫)から聞き取り調査をした中津川市学芸員原益彦氏談。
- (11) 塩田『樋口一葉研究』一三一頁。誓約書も紹介されている。
- (12) 一葉の父則義の知人、小林好愛の娘は、医学博士青山胤通に嫁している。青山は中津川市苗木の出身である。彼は鷗外に頼まれて晩年の一葉の診察をしたが、実は彼女は妻の知人でもあったわけである。樋口家に近いところに、中津川地方にゆかりのある人物がいて、その人が伝手となって紹介の世話などをしたのかもしれない。
- (13) 塩田『樋口一葉研究』二〇〇頁。
- (14) 虎之助は、別人の元で修業を続けたわけである。誠志から引き継

いで虎之助を弟子としたのは、同じく薩摩金欄の陶画師重武米山と推測される（塩田『樋口一葉研究』一九八頁）。

- (15) 塩田『樋口一葉研究』二〇三頁。ただし、現存する「陽明門」の一部を見ると、必ずしもすべて焼成された陶片で組み上げられていたものではないようである。

- (16) 雑記6「塵塚の一」（新版『樋口一葉全集』第三卷（下）六五四頁）。

- (17) 新版『樋口一葉全集』第三卷（上）脚注（二七七頁）。

- (18) 新版『樋口一葉全集』第一卷補注（二三〇—二三二頁）。

*付記 成瀬誠志および「陽明門」に関する資料収集につき、中津川市 苗木遠山史料館、千早保之氏（同館調査員）、原益彦氏（中津川市学芸員）、久翁典雄氏（源長寺東堂）、成瀬智子氏、和田克己氏（日本陶器株式会社）、安藤英利氏（多治見陶磁器卸商業協同組合理事）の協力を得た。心よりお礼申し上げる。

（二〇〇七年一〇月二九日 受理）